

生活と環境セミナー 公開講座

映画『利休』に学ぶ 映画作りの現場から。

映画監督 田中光敏

日時：平成25年 2月9日(土) 会場：福井市美術館

私は20年くらい前から福井でコマーシャルを作っていて、どうも私の体の中にはそういう福井のDNAが流れているんじゃないかなって最近本気で思っているところなんです。

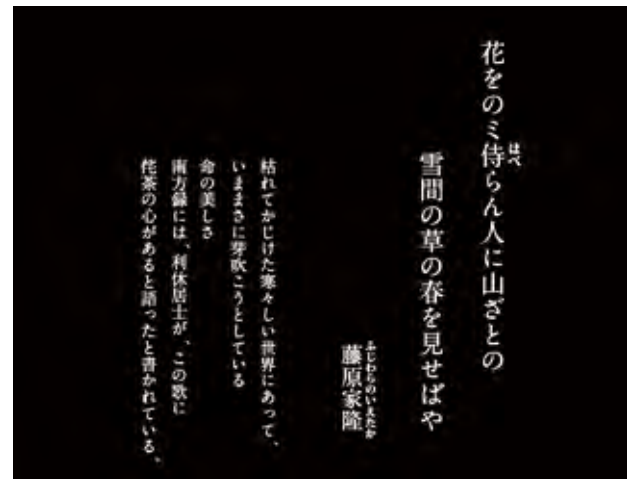
実は今、みなさんもお存知の『利休にたずねよ』という映画を作っている真っ最中で12月の末にクランクアップをして、仮編集をしている段階です。

「利休にたずねよ」という原作を読んだ方もいらっしゃると思いますが、原作ではいろんな方々が、いろんな言葉で利休にたずねていくというあらすじですが、映画では宗恩（そうおん）という利休の妻が、利休にたずねたかったことをひとつの流れにしています。当初私は千利休という名前は知っていましたが、詳しいことはほとんど知りませんでした。ですから「利休にたずねよ」という山本兼一さんの原作、それが私と千利休との出会いと言っても過言ではないでしょう。

ら良いのかなと思って、映画の中のいろんな言葉をひろってきました。このことについて今日はお話しようと思います。

『花をのミ侍らん人に山ざとの

雪間の草の春を見せばや』



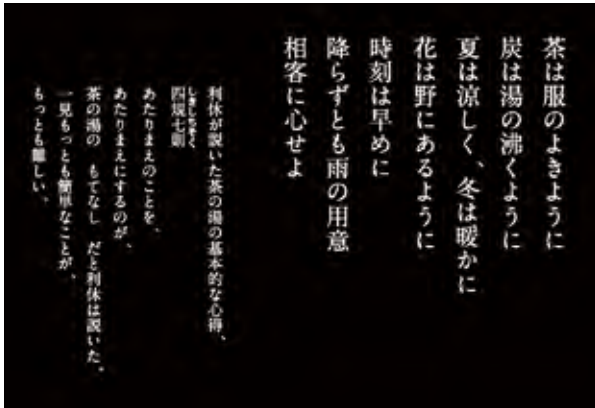
まず最初は、この藤原家隆（ふじわらのいえたか）という人が書いたこの言葉が、千利休という人を象徴しているのではないかと、というふうに歴史的に言われている歌です。

枯れてかじけた、寒々しい世界にあって、今まさに、芽吹こうとしている命の美しさ～だから、利休が飾る、その花、一番好んだのが椿。それも、花をしっかりと咲かせる椿ではなく、つぼみを一輪飾るのを非常に好んだというふうに言って伝わっております。それはたぶん今のお茶の世界の方々でも、そういうことをしているんじゃないかというふうに思っています。それを、映画の中でも、この言葉、この思いを大切に、映像表現やシナリオづくりに役立てています。



さて、今日みなさんに何をお話しようかなと思ったのですが、映画づくりで最初の行程の脚本をつくる時に様々な本をめくっていろんな勉強をします。そのときに、自分が印象に残った言葉をみなさんにお伝えした

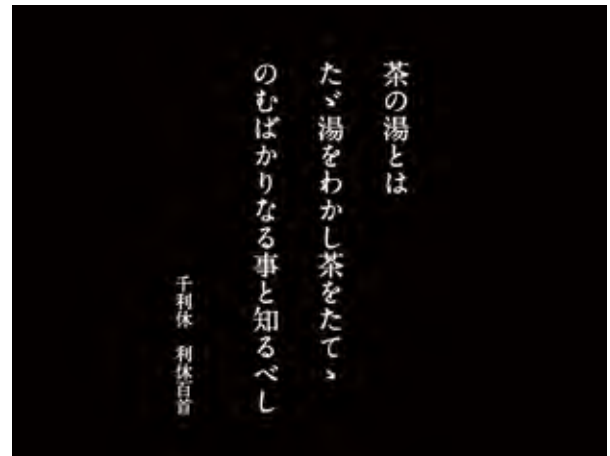
『茶は服のよきように 炭は湯の沸くように
夏は涼しく、冬は暖かに
花は野にあるように 時刻は早めに
降らずとも雨の用意 相客に心せよ』



当たり前のことなんですよ。当たり前のことを、利休が利休七則っていう形で残してるんです。私たちが映画で千利休っていう人をつくっていくにあたって、こういうことを考えている利休像を描いています。当たり前のことが当たり前のようにできる人というのは、非常に素晴らしいことだなあというふうに思っています。クーラーのない時代に、なかなか夏は涼しくとはいかない。夏は暑さをしのぎ冬は寒さをこらえ、花は野にあるようにという自然さですね。



『茶の湯とは たゞ湯をわかし茶をたてゝ
のむばかりなる事と知るべし』

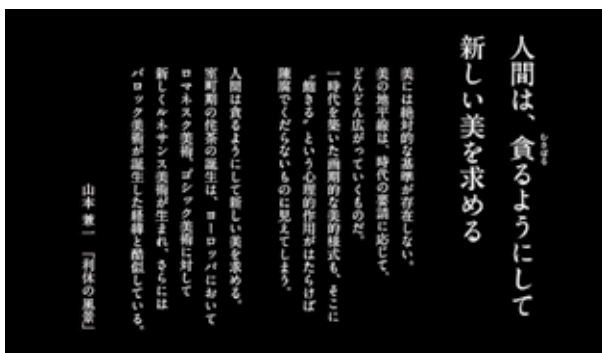


実は私が台本の1番見開きのところに、鉛筆で書いている言葉です。千利休という人は、それまでの非常にきらびやかで、舶来の高級な道具を使ってやっていたお茶の世界を変えました。要するに単純にお茶のための道具を作ろう、お茶を飲むためのお茶碗を作る。そして花を飾るものも、高級な壺とかではなくて日本の竹に一輪、椿をさすだけで美しいじゃないかと。また茶杓も同様に舶来の象牙のものを使っていたんですが、それも竹の茶杓に変えて、ただお茶を飲むために、お茶というものをやりましようよ。っていう考え方をすることで、千利休はある種の既成概念を壊したんですね。今は利休モノというと、非常に高価なものがたくさんありますが、ただ、利休がやろうとしたことは、もう一度お茶の原点に立ち返る。もう一度そういうものを見直す。日本の中にある、美しいものを見直そうっていうことから始まったものなのです。

今回の映画では、非常に大きな役割を持つ本物の茶碗がいくつも登場します。ただ土塊の土を焼いただけのお茶碗なんですけど、ただ、そのすごさというのは多くの人をも動かしてしまうほどの、歴史の重みとか、風格だとか、そういうものを持ったものなのかなというふうに感じました。

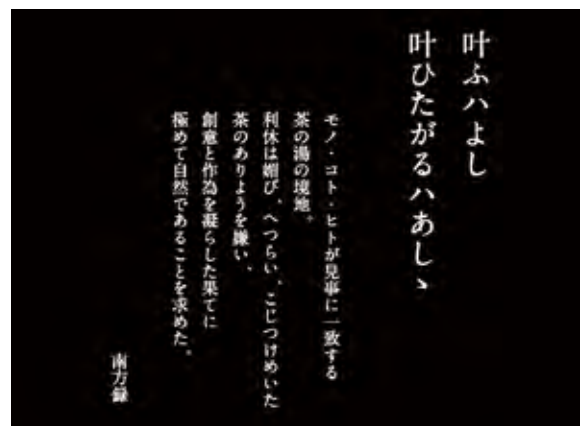
私たちの、心の中にも潜んでいる欲望とか、飽きてしまうというものも含めて、人間のそういうものが、時代を変えていくひとつの力になったり、エネルギーになったり、また時代を交代させてしまうことになる。だから人間は貪るようにして美しい美を求める。と解説しています。

『人間は、貪るようにして 新しい美を求める』



原作者の山本さんによると、一時代を築いた画期的な美的様式も、そこに「飽きた」という心理的作用が働けば、陳腐でくだらないものに見えてしまう。たぶん

『叶ふハよし 叶ひたがるハあし』



歴史をひもといていくなかで、利休という人はこういうことを考えていたのか、とわかる代表的な言葉。利

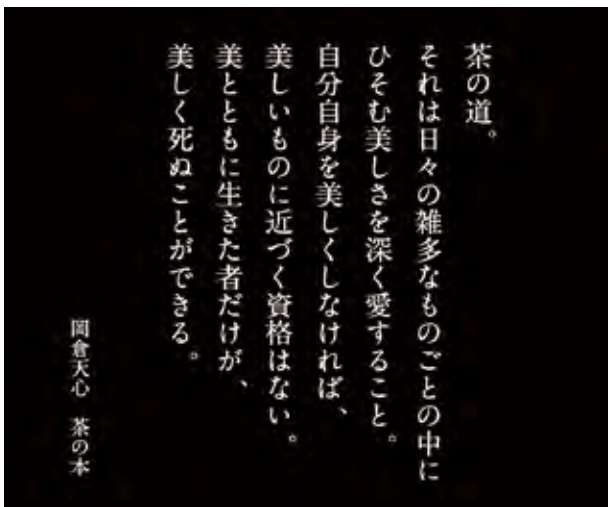


休を勉強するときに必ず出てくる南方録にある言葉です。

モノ・コト・ヒトが見事に一致する茶の湯の境地。利休は媚び、へつらい、こじつけめいた茶のありようを嫌った。つまり極めて自然であることを求めたのです。必要以上に曲げてでもなんとかしようということを非常に嫌いました。ですから利休を学ぶときに、この言葉との出会いに私自身は非常に感銘を受けました。利休像を表現するひとつの言葉だなというふうに思っています。

茶の道。

それは日々の雑多なものとの中にひそむ美しさを深く愛すること。自分自身を美しくしなければ、美しいものに近づく資格はない。美とともに生きた者だけが、美しく死ぬことができる。



福井とゆかりがある岡倉天心の言葉です。

お茶というのは、官能の美学と言われています。つまり、それは招く側がいくら立派なひとでも、お金持ちでたくさんの道具やすばらしいお茶碗を持ってお迎えしたとしても、正客として招かれた側が、その場を楽しもう、招いてくれた人と一緒になって、その場を楽しめる場にしようと思わない限り、その場は楽しくならないということなんですね。

美しい花を見たときに、あ、この花は美しい、と思える。そういう心を持ったひとだけが、その花が美しいと感じられるということでしょう。岡倉天心のこの言

葉というのは、なんかそういうことを言っているんじゃないかなと私自身は思っています。

もちろん私もお茶の世界の映画を撮るということで、1年半くらい前から、お茶の勉強やお茶の所作を習いにいきました。最初の頃は、なんか堅苦しくてすごく嫌だなあ。私にはどうも性に合わないなあ。正座もできないし、お茶のことなんにもわかんないし、軸の漢字も読めない。こんなんでお茶の映画が撮れるんだらうかって悩んでいました。

でも習っていたお寺の和尚が、帰り際に「監督、お茶っていうのは、ひとつひとつ形に意味があってやっていることだけれども、そういう形から入ってもらおうということではないんだ。監督が映画を撮ろうと思うのであれば、心を、そのお茶の中に潜む心を勉強してほしい。」と言われまして、気持ちが軽くなりました。しかし未だにお茶の心というのはなかなかわかりませんが。

この「利休をたずねよ」という作品と向かい合って、たくさんの人たちと共に試行錯誤しながら映画を形にしていくことができました。音楽ができ、そして、編集ができ、全体のトーンが決まっていく。今からおよそあと3ヶ月かかって、やっと1本の映画ができあがっていきます。今度のお正月には、自信を持って皆さんに観ていただける映画になってお届けできると思っています。今度は劇場でぜひとも、お会いしたいなと思っています。ありがとうございます。

それからぜひとも、『サクラサク』も映画として実現させて、全国の方々に観ていただけるように頑張りたいと思いますので、また皆さん応援してください。よろしくお願いいたします。

